



荻野運動公園 (撮影 小林会員)

令和4年8月号 Vol. 220
(2022年)

発行：令和4年8月8日

あつぎ観光ボランティアガイド協会

ホームページ <http://atugikanvola.sakura.ne.jp>

メールアドレス atugikanvola@yahoo.co.jp

発行責任者 会長 森島 誠 編集担当者 澤田 正弘

《企画ガイド：中依知の日蓮上人の旧跡を辿る》

行事区分：企画ガイド

日 時：7月7日(木) 9:30~13:00

場 所：山際～関口～中依知

参加者：一般13名、会員9名

猛暑予想の時期でしたが、運よく曇りがちの涼しさに恵まれ、ラッキーでした。会員9名、お客様は13名(男7名、女6名)で2班編成のガイドとなり、半数が80才以上の方でした。幸い、体調不良等の脱落者もなく、無事終了する事が出来ました。厚木バスセンターをスタートする時はお客様5名が見えなく心配しましたが、中平バス停で全員が揃いホットしました。



所定の場所で受付して、各班毎にほぼ予定通りにスタートできました。2番目のスポットの長福寺では住職さんから本堂の説明を聞き、助かりました。長福寺の境内にはたくさんの石仏と標石があり、参加の皆さんびっくりしていました。

次の山際神社では地元の老人会グループ7人さんとお会いして、元気な挨拶を聞き、嬉しかったです。ここで約10分のトイレタイムと水分補給休憩をとりました。

次の大信寺までは約15分の歩程のため、車に気を付けゆっくり移動しました。大信寺には観音の大先輩の中丸武夫さんのお墓があり、お客様の一人が是非お参りしたいとの希望があり、お参りしました。聞くとところに依ると、以前に厚木市の歴史勉強会の場でお世話になったとの事でした。



今回のメインの蓮生寺では予定していなかった住職さんのお話を聞く事になり、2班合同でお話を聞きました。お堂内はキンキンの冷房が効いており、丁度いい休憩になりました。(チョット冷えすぎたかも?) 住職さんのお話はやはり、日蓮さんに心酔した宣伝話が主体で、30分もかかりました! このため予定時間を超えてしまいましたが、有意義な時間だったと思います。

最後の浅間神社では下見会で勉強した新人会員の出番となり、いい経験になったと思います。今回の企画ガイドの各々の役割を担当して戴いた会員の皆様、どうもありがとうございました。
(山下武敏 記)



《 お城シリーズ 》

厚木市内に本当にお城があったのでしょうか？11月開催予定の企画ガイド『七沢城と七沢の歴史を訪ねて散策』の事前学習用として当会お城博士の田頭会員から山城について寄稿いただきました。しっかり学んでガイド係に立候補してください。来月号でも続編を掲載します。(編集担当)

厚木にある山城「七沢城址」(1) 田頭 文昭

厚木市七沢に、室町時代に造られた七沢城と言う山城があります。築城年と築城主は不明ですが、鎌倉公方・関東の歴史書である「鎌倉大草子」の宝徳十年(1450年)5月の書状に『七沢要害』として出てきてます。鎌倉公方足利成氏と家臣の関東管領上杉憲忠の戦いで、上杉方が負け七沢要害に籠り対抗したと出ています。



七沢城の全景
新編相模国風土記稿より抜粋

七沢城の概要

・戦国の山城 標高=100m 比高(城の麓からの高さ)は18m

・丘陵上の山頂部を削平し主郭を配置、連なる尾根上に郭と堀切を配して城を構成しています。

・城の構造(推定される遺構)主郭、2~4の郭、段郭、腰郭、物見台、虎口、堀切、竪堀、他七沢城の背後の山(標高=375m)に見城があります。山頂に物見の兵がいて、津古久(つこく)物見峠と連絡を取ったりさらに南の糟屋館(伊勢

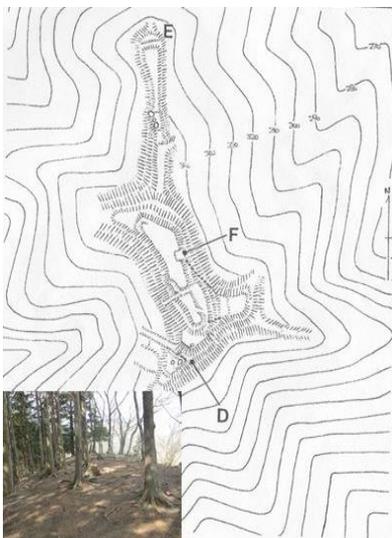
原市)へ合図を送ったりした場所と言われています。

・山頂を南北に段差をつけ主郭・二郭配し、大手と見られる東下に腰郭を設けた構造で、南尾根に堀切が確認出来ません。

・通称を見城とか物見台と言っていますが、山頂の削平規模や周囲の堀切や竪堀虎口跡等と見られる遺構から、単なる見張の場所ではなく詰城(つめじろ)※と想定されます。※詰城とは

①守護や戦国大名が領国内に設けた戦時の拠点となる山城。

②敵方に包囲された城の最後のとりで。



見城の平面図と現在の写真

15 世紀末、関東管領山内上杉氏と同族の扇谷上杉家が対立関係となり関東各地で戦闘を起こします。長享の乱です。長享二年(1488 年)2月、山内上杉顕定が扇谷上杉氏の背後を突き扇谷上杉氏の拠点である七沢を攻めます。その激戦地は七沢の南の入口に当る実蒔原(さねまきはら)でした。その戦闘で山内上杉勢は七沢城を攻略したことが史料にあります。しかし実蒔原の戦いでは寡兵の扇谷軍が山内軍を破っています。その後、後北条氏が相模の支配を確固すると次第に七沢城の重要性は薄れ廃城となりました。

◎何故戦国時代の城は土造りなのでしょうか？

①戦の恒常化による

南北朝時代、騎兵の攻撃を防ぐため急峻な山を要害とし、山頂に臨時的な軍事施設として城が築かれました。戦いが日常化した戦国時代になり、この山城が恒常的な軍事施設になります。

②敵の攻撃に対応するため早く築城する

戦国の城で、山城に関してのデータではありますが、完成するのに1ヶ月と、築城速度が速い事が分かります。なお数週間や2ヶ月で完成した城も記録に残っています。

③城を防御する創意工夫

谷や尾根など自然地形を活かした山城は、同じ縄張の城はなく曲輪や切岸・土塁・堀切などを駆使し防御性を高めました。曲輪造成や堀切で削り取った土を盛り土塁(どるい)を築き、まさに城の文字の通り「土から成る」もので、戦国時代の山城は建築施設ではなく、土木施設でした。

④築城のための「人・物・金」

築城する為には、人的資源(領民)や・物(建築資材)・金(賃金、資材購入代など)が必要で、城の縄張り、築城期間、作業人員、資材購入代などが必要で、総合的に期間・規模が決められました。

後北条氏の普請例では、家臣の知行高により賦課される知行役と、村・百姓に賦課される公事の2種類がありました。武田、上杉、毛利など各地の戦国大名にも共通しています。築城の材料調達も、知行役や公事役を賦課された者の役割で、材木として、杉や栗、桧、竹等がありましたが、特に竹が汎用性(武器としても使用)の高さからよく使用されました。木材は購入したり自前の山で切り倒したりして、可能な限り築城地の周囲で徴収して使用しました。

《備考》

- ・要害(ようがい)＝地形がけわしく守りに有利なこと。
- ・郭(くるわ)＝城を構成する区画で、陣地や屋敷地のために作り出された平場。
- ・虎口(こぐち)＝中世以降の城郭における出入り口のこと、狭い道・狭い口という意味がある。
- ・堀切(ほりきり)＝土地を掘って切り通した堀、水堀や空堀。
- ・豎堀(たてぼり)＝山城の斜面に、城に対して垂直に掘られた堀。
- ・曲輪(くるわ)＝城や砦の周囲にめぐらして築いた土石の囲い。江戸時代になり「郭」の字もあてる様になった。
- ・切岸(きりぎし)＝斜面を削って人工的な急傾斜の断崖とし、斜面下からの敵の侵入を防ぐ防御施設。

あつぎ郷土博物館 特別展 「有孔罎付土器と人体装飾文の世界」

会期：令和4年7月23日（土）～9月19日（月・祝）まで

前澤 宣子

あつぎ郷土博物館では、7月23日から特別展「有孔罎付土器（ゆうこうつばつきどき）と人体装飾文の世界」が始まっています。

「有孔罎付土器」とは、縄文時代中期（約5500年前～4500年前）に見られる特徴的な土器で、多くが樽型や壺型の形を持ち、土器の口の縁は平らで、その下に、一定間隔で開けられた小さな孔の列と罎状の粘土の帯が取り巻いています。分布の中心は関東地方および中部地方です。

この土器は出土数が少なく、多くが丁寧に作られており、精選された胎土（粘土）を用い、漆や顔料などの塗料が塗られたものや立体的な装飾が施されたものなどがある為に、日常的に使用する土器とは異なった目的の土器と考えられています。例えば、口の部分に動物の皮を張って祭りの太鼓として使用したという説、お酒を作る為の容器として使用したという説の2つが有力です。

展示「I. 有孔罎付土器のうつりかわり」では、縄文時代前期後半に「有孔土器」の存在があり、縄文時代中期初頭に現れた「有孔罎付土器」が中期中葉になると彩色が施され、人物や動物の立体的な装飾が多くなり、中期後葉になると、孔が器壁から罎に移り、器形は単純化し、中期の終わりを迎える頃には「有孔罎付土器」は急に姿を消し、入れ替わるように注口土器（ちゅうこうどき）や両耳壺（りょうじこ）が出現します。この流れを全て展示で見ることができます。

展示「II. 有孔罎付土器の用途を探る」の最後に、太鼓説の参考資料として皮を貼った「有孔罎付土器」と一緒に、インド、モロッコ、メキシコの太鼓の展示がありました。私は、ワクワクする太鼓のパフォーマンスを期待してしまうので、太鼓説に大賛成です。

展示「III. 人体装飾文の世界」へ踏み込んだ時、我が厚木市の林王子遺跡から出土した人体装飾文付き「有孔罎付土器」が、あの海外展でも引っ張りだこと言われる山梨県南アルプス市鋳物師屋遺跡（いもじやいせき）から出土した人体装飾文付き「有孔罎付土器」と仲良く並んでいるのを見て、思わず目を見張ってしまいました。鋳物師屋遺跡のこの土器は国指定重要文化財で、右手の3本指がまるでピースサインを掲げているように見えます。



人体装飾文付有孔罎付土器
（右側が厚木市出土）

私は2018年の夏に、空前の人気となった東京国立博物館の特別展「縄文—1万年前の美の鼓動」で、“手を上げ踊る祭の器”と説明が付けられたこのピースサインの「有孔罎付土器」と出会っているのです。

ここでは、手足のある全身が描かれている「有孔罎付土器」が6点、顔だけが描かれている「有孔罎付土器」が写真を含めて3点、出品されています。全身の人体文の多くは、両手両足を広げ、両腕は肘を曲げて上げ、3本指か4本指で、人のようにも蛙のようにも見える不思議な絵です。掲載した写真の2つの土器はともに人に似ていますが、蛙似のほうはあつぎ郷土博物館へ行って直接見て比べて欲しいと思います。私には、この6つの人

体も3つの顔面も、それぞれが勝手な意志を持っているように思われ、目を離すことができませんでした。

終わりに、博物館ではいつも思うのですが、今回の特別展でも、的確な資料と合理的な展示が拙い理解力を助けてくれて有り難いと思いました。本を読むより博物館の中を見て回る方が好きだと、改めて思いました。

気ままに歩いて

華鳥譜に描かれた鳥たち

阿部 啓冊

幕末に出版された本に華鳥譜（かちょうふ）があります。

華鳥譜は備後福山藩の藩医であった森立之（もりたつゆき）が編纂した本で、谷文晁（たにぶんちょう）のもとで修業し非常に繊細な画風の博物画家として知られていた服部雪斎（はっとりせっさい）が絵を担当しています。

華鳥譜には、厚木で見かける鳥も多いので少しご紹介してみたいと思います。

まずカルガモです。

春先にはぼうさいの丘などでカルガモが子供を連れて引越しをする姿を見かけます。顔が白っぽくくちばしの先端にちょっと黄色があるのが特徴で、ヒナが生まれてしまうとオスは母子から少し離れた場所に移動し近づくことはないそうです。



続いてサギです

この鳥もよく見かけます。

日本には19種類のサギがいるそうです。描かれているサギはくちばしやあしが黒いのでチュウサギではないかと思います。華鳥譜にはくちばしと足先が黄色いことが特徴のダイサギも描かれています。

キツツキの絵もあります。

世界には200種以上のキツツキがいるそうですが、その多くは日本周辺に生息しているそうです。描かれているのは頭と頬に赤い模様、おなかに黒の横縞模様のあるキツツキですからアオゲラでしょうか。小野付近ではコゲラが朝早くからコツコツと木を突つつく音がしてにぎやかに飛び回っているのを見ることが出来ます。

キツツキは平安時代に「てらつつき」、室町時代に入ると「けらつつき」、江戸時代には「けら」と呼ばれていたそうです。キツツキの仲間の名前にアカゲラ、アオゲラ、コゲラなど「ゲラ」がつくのはそのためでしょうか。





カワセミも描かれています

厚木でも散歩の途中で出会うことがあります。崖にある穴を住処にしておりときおり空き家を見かけることもあります。散歩の際に出会うと素早い動きと羽の美しさに目を奪われてしまいます。巣の中は意外と生臭いそうですが環境保護のシンボルとして人気が高く一定の場所によく表れるためカワセミを撮影しようと頑張るカメラマンにもよく出会います。

カイツブリもおなじみの鳥でしょうか。

小鮎川や恩曾川で泳いでいるのを見かけることがあります。私はカモの子供と間違えてしまいましたが、首の赤っぽいのはカイツブリだと教えていただきました。水に潜るのが上手で水草を集めて浮巣を作っていますので、川辺で草の茂っているところをよく見ると出会うことがあります。

というところで、実は華鳥譜は漢方の医学書です。福山藩の藩医であった森立之が編纂した病気のときに食べるとどのような効果があるか説明するための書物で、そのほかムクドリ、ヒヨドリ、スズメ、カラス、ヒバリやトキなど61種類の鳥が描かれており、華鳥譜の「華」を分解すると六十一になることが本の名前の由来となったそうです。



主な参考文献

華鳥譜（選者：森立之 画家：服部雪斎 国立公文書館蔵）

*華鳥譜の図は国立公文書館のデータ利用指針に従い使用しました。

野外観察ハンドブック1、2（日本野鳥の会）

最近の活動

日付	場所	内容	参加者
7月7日	中依知	企画ガイド 「中依知の日蓮上人の旧跡を巡る」	会員 9名
7月9日	アミュールあつぎ	定例会	会員 18名
8月4日	南公民館	編集会議	会員 4名

編集後記

7月31日に予定していた広沢寺温泉・玉翠楼での暑気払いの昼食会が新型コロナ感染の急拡大により中止になりました。そして3年ぶりに開催予定だった「あつぎ鮎まつり」も延期となりました。8月6日夜の「大花火大会」は大勢の人が楽しみにしていたと思います。厚木市開催行事の中止に伴い当会活動の3本柱のひとつである「行事支援」になかなか参加できていません。

編集委員 阿部 啓冊 小林 直樹 澤田 正弘 前澤 宣子